の犬に超申候由。

一、澁谷和泉守聞書之内拔書

享保十九年甲寅十月八日
前田澁谷和泉守

御側近く被爲召上意には、大納言殿には諷亂舞の事は、身の働き旁翫べき品也。尤古來より有來猿樂にても、被用過れば又益なし。然ども折にふれては、有間敷儀にてもなし。尤の事也。予が鷹野・猪狩を業とするを、業とする杯と被存事も可有なれども、左様の事にてなし。治世に亂を忘れざるは鷹野・猪狩也。如何となれば、人數つかひ覺ゆる事は、大小の人數によるべからず。又諸士弓・鐵炮を射させ打する事有功。また未熟を試て金銀衣類をとらする事は、第一其武功を馬前にあらはすを賞美しての事也。然れば諸士も外様に居るもの共迄も、予を見知るための事也。殊に兩番のものども、歴々にして我手足同意なれども、近習へは遠し、紋付の衣類などを買ふ事尤寡し。かやうの時とらずれば、骨髄に徹し難有存事也。然れば手足にも成べき儀也。第一近代武備衰へて、大小名諸家中に至りても、遊山玩水に長じ、酒色に溺れ身に綾羅錦繡をまとひて、樂を專として遊藝をのみ第一として、武士のなら

はし少もなく、公家侍か町人杯の如く柔弱に成來し事は、上に武備なき故也。當代に至りて漸々旗本の風儀も、少し見能成し事か。いかめしき事なれども、予が武功を好み、儉約を用ひ無用の費なく、不及ながら善政廉直を施さんと欲する故に、是に習ひ、國々諸大名並譜代の大小名迄も、歸國の節は鷹野・猪狩などあるよし。皆人數を使ひ諸士を懐け、剛應をも試るなるべし。さなくては慰に費多く、民の困窮たるべし。召使ふ諸士も、此時武道を主人の見參に入れんと思ふべし。然るを主人慰と迄存するは、心得違にて上下和せず、專要の時何の用に立べき哉。然は君臣水魚の心なく、國傾き家殆かるべし、可愼の第一也。家に諫子なく國に良臣なきは、其主の愚昧評するにたらず。國家荒廢すべき事、掌を返すが如く成べし。忠臣は身を捨て諫争して、家を立て主を守るの法也。空うして祿を食て、其職分を忘るゝは武士にあらず、恥しき事の甚也。其家臣頭取可心得事也。予天下の道統を繼て片時も忘れず、年既に老に及といへどもいまだ氣力不衰、諸民の困窮を意に掛て、既に平和に及ぶ。儉約又は諸事の費なきを私にせず、行々天下の

諸人安堵の心を以ての事也。然して諸國の吉凶・榮衰、家中仕置迄も居ながら知て、城下の事は言に不及日々相聞えり。誠に天道に愜ひ天下を掌握する意なるべし。さるによつて近年旗下の諸士、馳走達者に武藝を嗜事、予が心を施の故也。是等は專要の時は必用にたち、死を先にすべき驗

乙卯十一月二十五日より、初めて隔日に大地新八郎昌言へ命ありて儲君の侍讀と成りぬ。大學を授けたてまつる。
霜月二十五日、はじめに金谷侍讀の日の朝、天神の社に詣で、大和歌を口ずさみてたてまつりける。
君のため祈ることろぞふたつなき身の行末は露も思はじ

なり。故に鷹野・猪狩、予が治世の習、將軍の業也。乍然予も時に取ては働も懶く、鷹野に進まざる折節ありといへども、勵て出る事あり。萬端是に準へてみるべし。天下泰平といへども、未だ訴論多く人直ならず、やゝもすれば罪人ありて予が耳を駭かす。是予が不敏なる故と意得て、片時も政事を忘れず、諫を納る事水の流る如くにす。大納言殿にも天下の主と成ては良臣を撰び、少しも私なく意得可有事也と細々上意也。和泉守謹て承之。此旨大納言様へ申上候様にとの御事と相聞に付、大納言様へ則上意の趣、可申上哉と奉伺候へば、上意には、少しも遠慮すべき儀にあらず、勝手次第折を以て申上候様にとの上意にて、和泉守退出す。

一、大地昌言、前田宗辰の侍讀となる